

体験活動を通じて三世代交流、 そして健全な育成を

兵庫県姫路市（旧夢前町）・あおぞら会





旧夢前町はもともと農業が盛んな姫路の奥座敷とも呼ばれたのどかな農村地帯だった。しかし今では人口も大幅に増加し、新住民六割と新しい町になった。あおぞら会代表の永安力さんたちは文化・伝統を子どもたちに体験させたい、伝えたいとの気持ちで日増しに強くしていった。永安さんは、退職後町の生涯学習リーダー養成海外研修員として目にしたオーストラリアの様子に感銘を受けた。少子化が進むオーストラリアでは多くの高齢者が子どもたちに役立てる時間を創り出している。しかも高齢者自身が楽しみながら社会活動に自分を役立てている。日本に戻り自分や地域を見つめ直した。自分の地域でも子どもを見守り指導していく活動を実行しようとした。

永安さんは当時老人会の会長として、小学校の体育館をよく利用していた。そこで、壺坂敏子校長(当時)と話をする。その中で、学校が週五日制になり子どもたちの受け皿を地域につくりたいという、二人の思いが重なり合い、あおぞら会をつくることとなった。また、夢前町には一校区一家族という町のスローガンがある。これは、「一校区が一つの家族のようになる」手作りの地域づくり事業を進めるといふもので、あおぞら会は、地域住民、学校、行政の思いが重なりスタートしたともいえる。

年間事業は、今回の竹細工・料理教室のほか、ひまわり園場と森あそび、芋掘りと焼き芋大会、民話を聞く会・餅つき大会など。そのほか授業の一環として米作り・芋作りなども行なっている。



米作りについて壺坂さんは言う。「稲を作るのは本当に大変。子どもたちは面白いところだけやっているから、本物体験になっていないという反省はあるんです。辛い作業もやってこそその体験でしょうね」きつと一歩一歩前進していくだろう。そう感じさせる雰囲気は同会にはある。

竹細工教室では、体育館で弓・水鉄砲・竹とんぼを作った。また、料理教室では女の子を中心におはぎ作り。終了後参加者全員で試食会となる。

永安さんは開会のあいさつで思いをこう述べた。「農村地帯である菅生地区のことを知ってほしい、体験してほしい、立派に育ってほしいと願いを込めてやっています」。地域のおじいちゃん、おばあちゃんへの思いはきつと子どもたちや親たちに伝わるだろう。金井貞文校長は「学校の勉強はみんな頑張っています。でも大切な勉強はそれだけじゃないんです。日本の文化、例えば竹細工やおはぎなど古くからある遊びや食べ物も大切な勉強です」と語りかけた。

メンバーが切り出してきた竹を使ってそれぞれに竹細工を作る子どもたち。ひよっとしたら保護者のほうが夢中になっている？ 上級生が下級生に教えたり、親同士つながりもできたり、と大きな家族のような感じになっている。

子どもたちの手先を見つめながら、「これくらい真剣に勉強もしたら、偉いモンになるわ」と竹とんぼの指導に当たる繁戸一男さんは目を細める。

最後は自分たちで作ったおはぎを味わう。参加者は二百名を超え、計四百個のおはぎを作った。



「子どもたちと接することを本当に喜んでいる。パワーをもらっている。用事がある人は休んでもいいと言ってもほとんどみんな手伝いに出てくれる」永安さんは会の雰囲気をこう話す。壺坂さんはこう言う。「子どもたちに楽しんでほしいのはもちろんですが、自分たちも楽しもうと思っています。そうじゃないと息苦しくなってしまう」。確かに言葉通りだ。

子どもたちと一緒になにかをやらうとするときに大切なこと、として永安さんも壺坂さんも同様に言う。「やはり学校の協力、先生方の考え方が大事。会が独自にチラシを配って子どもたちを集めようと思ってもダメ。学校の協力なしには子どもたちを集めることもできない」。まだ学校が開かれていない当時、壺坂先生の理解の大きさを感じることは永安さんの言。地域と学校が結びついて初めてこのような取り組みが成功する。

同会では、学校との連携を深めるために、運営上の工夫として、菅生小の校長先生に理事として参画してもらっている。現校長の金井先生も理事として全面的に協力してくれる。

壺坂さんの夢は、小学校区よりもっと小さな地域で、四〜五人のおじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちと接する場を創り出すこと。あおぞら会での力がいつかそれを実現してくれるだろう。

■連絡先 〒六七一―二一三四

姫路市夢前町菅生潤一四五九

あおぞら会代表 永安 力

